

東部ポリネシアの場合

著者	柴田 紀男
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	39
ページ	17-30
発行年	2003-06-30
URL	http://doi.org/10.15021/00001907

東部ポリネシアの場合

柴田 紀男

- | | |
|-----------|------------|
| 1 ポリネシア言語 | 3 クック諸島の場合 |
| 2 危機の型 | 4 復権運動 |

1 ポリネシア諸語

ポリネシアの諸言語は、すべてオーストロネシア語族と呼ばれる語族に含まれ、その一つのサブグループを構成している。比較言語学的にはよくまとまったグループである。ただ、そこにいくつの言語があるかという点、あのまばらにしか言語が分布していない地域でも、数える人によって違った答えが出る。普通は37言語とか39言語とか言われている。しかし、この数字を「言語数」といいいいかどうか、疑問がないわけではない。

ある島に3つの村落があったとする。少し前の時代だと、村落ごとに自分たちの集団を呼ぶ名前があり、その名前を言語の名前にもしていた。外来者がある村落の言語を隣村の言語と同じだと考えて、「あなたたちは、隣村の人々と何の不自由もなく話をしていいる。あなたたちの言語と隣村の言語は同じ言語ではないか」と主張しても、「いや、話は通じても、言語は違う」と反論される。この反論で言う「言語」概念は、アメリカの文化人類学者ハドソン (Alfred B. Hudson) の「同言」(isolect) という用語のそれに近い。彼は、カリマンタンの言語を研究した時、集落単位ないし村単位で「自分たちの言語は独自の言語だ」と話し手たちが主張する言語単位を「同言」とよんだ。ポリネシア諸語について語る時の言語単位は、往々にしてハドソンの「同言」にほぼ近いものを含んでいる。ポリネシア諸語は「39言語である」という時、このことを念頭に置く必要がある。

ポリネシア諸語は、類型論的には、大きくトンガのグループとそれ以外のグループとに分けられる。トンガ・グループは、能格言語の解釈を許すようなタイプに属している。

それに対して、それ以外のグループの言語は、さらに西部グループと東部グループに分けられるが、どちらも能格言語的な解釈よりは対格言語的な解釈の方が妥当であるとされる。

「西部グループ」というのはサモア語と「アウトライヤー」(域外諸語)を含んでい

る。サモアは、力士小錦のお父さんお母さんの出身地である。「アウトライヤー」とは、ポリネシア地域の外部に分布している言語という意味で「域外諸語」を指す。域外諸語は、メラネシアにもミクロネシアにも分布している。すべて小さな話者集団によって話されているポリネシア語である。「東部グループ」と称するものは、タヒチ語、ハワイ語、マルケサス語、ラパヌイ語（イースター島の言語）など、残余のポリネシア語をすべて包含する。

それぞれのグループに属する言語数は、トンガ・グループが「2言語」、西部グループが「15言語」、東部グループが「11言語」（合計28言語）である。これはブルース・ビッグズ（Bruce Biggs）という学者がカウントした言語数を示したものである。先に引用した「37言語ないし39言語」という数字とはかなり開きがある。ビッグズは、ニュージーランドのオークランド大学マオリ学科（Department of Maori Studies）の教授で、長年にわたってポリネシア諸語およびニュージーランド・マオリ語の研究を指導してきた学者である。ここに示した言語数は、彼が「私はこう判定する」としてまとめた言語数である。トンガ・グループの言語数は、誰が数えても2言語である。ビッグズは、たがいに通じるか通じないかという相通性（mutual intelligibility）によった。相通性は、よく使われる概念である。しかし、何かかなり怪しげなものがあるように思われる。大体、島の人たちは、自分では積極的に話さないまでも、二つか三つの言語は頭の中に入っている。相通性を考える時、このような状況をどういうふうにも考慮に入れるかがたいへん難しい。便利な道具概念だから私も使うが、問題なしとしない。ちなみに、ラギツクア・モエカアは、「ゆっくりと話せば、東部ポリネシアの言語はたがいに理解される」と書いている。

2 危機の型

私たちは「危機に瀕した言語」について論じ記述しようとしている。そこで、「危機の型」というふうなことを考えてみたい。とりあえず四つの型を立ててみる。すなわち、「絶滅」「代替／併合」「後退／衰弱」「変化／変質」である。五つ目に、ごみ箱として「少数化」を立てる。

第1の型は「絶滅」（部族絶滅）である。ある言語の話者集団が、完全に途絶えるケースである。例はいくらかもある。ポリネシアでは、チャタム語が絶滅の例の一つである。ニュージーランドの南島の少し東の方に、チャタム島（Chatham Islands）とよばれる群島がある。チャタム語はそこで話されていた。

余談だが、ポリネシアでは「○○島」というような単純な名称が、多くの場合にその

名前で一括される一群の島々を指す。環礁の場合だと、30とか50とかいう多数の島が一つのグループを構成し、それに一つの島の名前がついている。もちろん土地の人は、その多数の島々の一つずつに固有の名前をつけている。また、どんな小さな島の住民も、自分たちが住んでいる土地を島だとは言わない。私たち日本人の多くは、日本の Honshu Island に住んでいる。しかし、私たちには「本州島に住んでいる」という意識は全然ない。ポリネシアでは、端から端まで見渡せるような小さな島でも、「ここは島ではない」「ここは陸地だ」と言う。「島というのは、あそこに見えている、椰子の木が1本しか生えていないような場所だ」と言う。

さて、そのチャタム島と呼ばれている群島では、かつてチャタム語という土着の言語が話されていた。その島の住民はモリオリ (Moriōri) 人と称していた。彼らの言語はモリオリ語ともよばれる。「モリオリ」という名前は「マオリ」という名前に比較言語学的に対応している。1835年に、ニュージーランドの北島から、タラナキ (Taranaki) 人が船に乗ってチャタム島に侵入し、大部分のモリオリ人を殺してしまった。少数だけ生き残った頑健な島民は、タラナキ人の奴隷にされた。奴隷の身分ながら細々と子孫を残していたが、1933年に最後の1人が死亡し完全に絶滅した。これは、言語の「なくなり方」の一つの典型である。モリオリに関する記事は、ニュージーランド国会の議事録に、モリオリ語の単語リストなどとともに、掲載されている。

危機の二つ目の型は「代替」ないし「併合」である。適当な名称を思いつかない。ニウアトプタブ語 (Niuatoputapu) がその例である。現在のトンガ王国の領域を、南部・中部・北部と3つの地域に分けるとすれば、ニウアトプタブ語はサモアに近い北部に分布していた。この言語は、西部グループに属する言語であった。すなわち、サモア系の言語であった。それが、18世紀から19世紀にかけて、完全にトンガ王の支配下に入り、トンガ系の言葉に置き換わってしまった。この場合は、人間が置き換わったのではなく、言語だけが置き換わったと考えられる。

タヒチを首邑とする仏領ポリネシアにも類似のケースがある。ルルツ島 (Rurutu) やツプアイ島 (Tupuai) の言語がそれである。これらの島は、仏領ポリネシアの南の方、南回帰線を南に超えて熱帯圏を外れたあたりにある。これらの島では、ごく最近まで、すなわち100年前とか50年前までは、細々とそれぞれの島の言語が話されていた。現在は、タヒチ語に置き換わっている。ただし、現在ルルツ島で話されている「タヒチ語」と呼ばれる言語と、現在タヒチ島で話されている「タヒチ語」とは、同じものではない。同じものではないが、相通性がある。ツプアイ島の「タヒチ語」についても同様である。ここでも、人間が入れ替わったというよりは、言語だけが置き換わったのである。

危機の第3の型は、「後退」とか「衰弱」とかよべるようなケースである。これも適当な名称を思いつかない。これは、以下のようなケースを指す。

例えば、タヒチでは「タヒチでタヒチ語を話しているやつは島の連中だ（タヒチの人間ではない）」などと言う。この「島の連中」というのは、ツアモツ諸島 (Tuamotu) などからタヒチに移住してきた人々を侮蔑的に指す。ツアモツ諸島は、フランスが長年に渡って核実験をしていたムルロア環礁などを含んでいる。もとのタヒチ人はタヒチ島を「島」とは思っていない。ツアモツ諸島のようなメトロポリスから離れた場所から、人々はタヒチ島にある首都のパペエテ (Papeete) にやって来る。大多数の移住者は、仕事を求めてやって来る。そういう人たちが何年かタヒチ島に住むうちに、もと住んでいた故里の島の言葉はすっかり忘れて使わなくなる。母語に代えてタヒチ語を使うようになる。タヒチ人の方はどうだろうか。もとのタヒチ人は、タヒチ語を話すよりはフランス語 (威厳言語である) を話した方が「格好がいい」というわけで、彼らも母語に代えて宗主国の言語フランス語を話す。そこで、パペエテの街路やカフェでタヒチ語を話しているポリネシア人は「絶対にタヒチの人間じゃない」ことになる。「タヒチ以外のどこかから来た田舎者たちだ」と見下される。「タヒチ人は人の大勢いる所で、タヒチ語なんか決して話さない」と言う。

また、クック諸島のラロトンガ島 (Rarotonga) 以外の島々の言語状況もそれである。地図を見ると、クック諸島は赤道を挟んでハワイ諸島の反対側にある。大体経度が西経160度ぐらいである。緯度は、熱帯圏だから南回帰線より低緯度に入っている。島々自体はどれも大きな面積はない。この国の首都はラロトンガ島に置かれている。この島の名は、英語などでは「ラロトンガ」のように発音されるが、土地の発音では「ラロトガ」(「ガ」は鼻濁音) である。先ほどの「トンガ」という地名も、鼻濁音を使った「トガ」である。このラロトンガ島が、イギリスの植民地時代も、それに続くイギリスの保護領時代も、ずっと「クック諸島」と呼ばれる地域の行政の中心だった。ラロトンガ島の状況も、タヒチ島のそれに似ている。外島 (ラロトンガ島以外の島々) からラロトンガ島に出てきた人たちは、英語は当然として、その他にポリネシア語としてラロトンガ語を使う。自分たちの故里のポリネシア語は使わなくなる。もとのラロトンガ島の住民たちはどうするか。彼らは、昔から英語に曝されることが多かったから、日常の言語生活はますます英語に比重を移す。ここでも、気が付くと、ラロトンガ島でラロトンガ語を話しているのは、ラロトンガ人以外の人間だけだ、という状況が生まれている。

ハワイではどうだろうか。1980年のハワイ語の母語話者数は、大体500人程度である。500人というのは過大な数字かもしれない。現在のハワイ語話者の多くは、ハワイ語を習って第二言語として (あるいは中間言語として) 話している。ハワイ語の母語話者のほとんどは、ニイハウ島 (Niihau) という島に居住している。この島は、ロビンソン家

が所有し、全体が牧場になっている。そこに、牧場の使用人として住んでいるハワイ人たちは、先祖から途絶えることなくハワイ語を話してきた人々である。島の所有者は、言語学者であろうと、ビジネスマンであろうと、電話局の職員であろうと、外部の間人はこの島に立ち入らせない。彼は、純粋なハワイ語とハワイ文化を、自分の島で牛や羊とともに、守り続けている。事実、この島だけには、古いハワイの文化やハワイの言葉が残っているとされている。いずれにしても、外部の間人で許可を得てこの島に入った人はいない。ただ、緊急の際にヘリコプターでこの島に入った医師はいるらしい。

以上のように、行政の中心地の言語（タヒチ語、ラロトンガ語、ハワイ語）は後退している。衰弱していると言うべきか。多数の話者が居るにもかかわらず、本来それを話すべき人々は、いつのまにかその舞台から消えてしまっている。

4番目のタイプは、「変化」ないし「変質」である。これもうまい用語ではない。

先に触れたフレンチポリネシアのツアモツ諸島（タヒチ島より東の方の小さな珊瑚礁の島々）のような所では、タヒチ帰りの人たちが、次々に自分たちの言語の中に、タヒチ語の単語を取り入れる。この島々の人々も総じて歌が好きである。歌（ラブソングが多い）は、大体タヒチ島で生産される。カセットに録音されて入ってきたり、ディスクジョッキーつきのラジオ放送で流れてきたりする。歌詞はみなタヒチ語である。そして、いつのまにか、たしかに話している人間はツアモツ人であるが、ツアモツ語とは名ばかりで、単語はもちろんのこと、文の造りまで、もう半分はタヒチ語になっている。ツアモツの年寄りたちに訊くと、「たかだか40年か50年で、ずいぶん変わってしまった」と言う。そういう変化というか変質は、言語としてはごく当たり前のことなのかも知れない。しかし、多くのものが失われたと言う点では、これも危機の一形態である。

私は来年からペンリン語（Penrhyn）の語彙調査を計画している。ペンリン語（あるいはクック諸島マオリ語ペンリン方言）は、クック諸島の最北端に位置するペンリン環礁の言語である。この環礁は、北はキリバス（Kiribati）の海域を挟んで、ハワイ諸島の海域に接している。「ペンリン」は、イギリス人がつけた名前である。ヨーロッパ船として初めてこの環礁を望見した英国の軍艦の名前である。土地では、「トンガレバ」（Tongareva）とか「マーガロガロ」（Mangarongaro）とかよばれている。しかし、一番通りのいい名前は「ペンリン」である。

この島にかぎらず、ポリネシアでは島の名前は頻繁に更新される。島の名前がどのような経過を経て更新されるかは未詳である。しかし、たいていの島は、四つも五つも名前を持っている。まだ「この名前の前はこの名前を使っていた」というようなことを記憶している人もいる。しかし、「どうして名前を変えたのか」と訊ねても、納得のいく説明はない。余談だが、東部インドネシアにロティ島という島がある。この島では何十

年か前に、島中の大きな地名が一斉に変わったことがあるそうだ。近くインドネシアでは大きな選挙がある。もし選挙の結果で中央の政権が変われば、島の名前も村々の名前も変わるのではないかと推測されている。ポリネシアでは（ポリネシアにかぎったことではないだろうが）、日常の言語と儀礼の言語（少し威厳を持って演説をする時などの言語）とが、かなり異なる文体をもつ。使用する語彙が違ったりする。例えばニュージーランドから来訪した総督に歓迎の辞を述べるというような場合には、日常の言語とはまったく違ったフレーズが使われる。そういう言語では、日常使っている島の名前は、まったく別の名前に置き換えられる。

ペンリン島の人口は、大体500人程度である。これは、1994年ころに、別の島で、たまたま遊びに来た、この島の保健婦／看護婦（英語で district nurse とよばれている）に会った時に、彼女から聞いた数字である。たいていの島で保健婦は、健康状態を記録した島民のリストを持っていて、一番確実に人口をつかんでいる。ここでもツアモツ諸島と類似の変質が起こっているかも知れない。話者人口の小さい言語は変質しやすいのではないか。

危機の5番目の型（上記4型へのゴミ箱）として、「少数化」がある。少数の話者は言語を保持することが困難であると推測できる。随分小さい話者人口の言語もあるらしい。極端な例では、話者人口が2人とか3人のケースがある。話者人口が1人になると、その言語が話者の言語生活の中でどのように機能するのだろうか。「少数化」という時の「少数」として、大体「500人未満」を想定する。始めに挙げたポリネシアの39言語の話者人口はどうなっているだろうか。1995年の予備センサスのデータが手許になかったので、大体80年から85年ないし90年のデータである。有効数字も、1桁だけものから3桁まである雑多なデータで見えていく。

ソロモン諸島に分布する域外諸語のアヌタ語（Anuta）とかシカイアナ語（Sikaiana）では、300人とか400人である。ヴァヌアトゥ（昔風に言うとニューヘブリデース）のマエ語（Mae）が200人ぐらいである。それから仏領ポリネシアのラバ語（南回帰線を越えた南に分布する）が400人である。

これらの言語は、どのようになっていくのだろうか。何かいろんな問題が起こりそうな予感はある。一つの参考として、ラパヌイ語（Rapanui）の歴史の一端を見ておこう。ラパヌイ語は、現在はチリの領土になっているイースター島（イスラ・デ・パスクワ「復活祭の島」）の言語である。オランダ人が、復活祭の日曜日（イースター・サンデイ）に見つけたので、この名前がついている。この島では（ポリネシアのほかの島々でも）、1862年にペルーの奴隷商人による奴隷狩りが行なわれた。当時のペルーでは、果樹園の労働力、グワノ鉱山の労働力、家事労働力など、多くの労働力を必要としていた。「人

さらい」という形で労働力が集められた。それが奴隷狩りである。奴隷狩りはクック諸島にも及んだ。さらわれた人々の名簿は記憶されていないが、「○○と△△は、英語を覚えて生きて帰ってきた」というような話は今でも伝わっている。

この事件で、カトリック教会は、ローマの政治力を利用して、スペインあるいはペルーに圧力をかけた。その結果、さらってきた人をすべて元の島に返すことになった。しかし、送還はきちんとは行なわれなかった。奴隷商人たちは、さらった島民たちを必ずしも元の島には返さなかった。キリバスの方でさらわれた島民が仏領ポリネシアに返されたとか、そんな話が今でも伝わっている。

その事件の結果、イースター島の人口はほとんどゼロになったのではないと言われていいる。事件の少し後、1877年にフランスの軍艦が調査した数字が残っている。その年の人口は111人だった。ただし、この111人の中には、奴隷狩りの時にタヒチ島に出稼ぎに行っていた人数が含まれている。現在のラパヌイ語は、比較言語学の教科書に出てくるほど、他の東部ポリネシアの諸言語から離れてはいない。むしろ語彙構成は、非常にタヒチ語のそれに近い。ひよっとすると、奴隷狩りの後でイースター島に残った島民は、洞穴に隠れていた1人か2人だけだったかもしれない。もしそうだとすれば、ラパヌイ語は、いったんは完全に消滅したのかも知れない。生き残った人たちは、わずかに残ったラパヌイ語の断片（口頭伝承など）をタヒチ語の中に埋め込み直して、それが「これは私たちの言語だ」として存続しているのではないか。なにぶん、奴隷狩り以前のラパヌイ語がどんな言語だったかは、ほとんど何も分かっていない。

あの有名な「語り部の板」(kohau rongorongo) は、チリでは第一級の国宝である。あれも、あまり古いものではなくて、ヨーロッパ人が文字を書いているのを見て、イースター島民が「自分たちも文字を作りたい」「言葉を形に留めたい」と発起して作ったのではないか、という説がある。この説はかなり有力になりつつあるように思う。

イースター島民は、自分たちの言語は祖先代々連綿と継承されてきたのだと思っている。しかし、実はある時、他の言語が接木されたかもしれないのだ。正確なことは何もわからない。

3 クック諸島の場合

「クック諸島の場合」に話を進める。

クック諸島民の名前(人名)は、その人が生まれた時を記念するために、誕生前後の事件によってつけられる。「顔にけがをしていた」とか、「寝小便をした」とか、「人の物を盗んだ」とか、非常に分かりやすい名前が多い。しかし、酋長(首長)の家系などでは、例えばラギツクア・モエカア(Rangitukua Moeka'a)のように、命名法は少し違

う。“Rangi”は「天」あるいは「空」である。“Rangitukua”は「空におかれたる」を意味する。これが彼個人の固有の名前である。一般に“Moeka'a”のように個人名の2番目の要素は父親の名前（父称）である。しかし、首長の家系などでは、父称ではなく、その家系の名祖（eponym）の固有名である。“Moeka'a”も彼の家系の名祖の名前である。“moe”は「眠る」を意味する。“ka'a”は、椰子の実の中果皮の繊維をほぐして、タロイモ畑（日本の水田に酷似）の泥の中に放置して、純粋な繊維だけを取り出したものである。この繊維は腐敗に強く、昔はカヌーの部材を結合するのに使われた。濡れたり乾いたりする状態でも、非常に長持ちする。“Moeka'a”は、その繊維で作った藁（寝莫藁）で眠ることを意味する。一般の島民はタコノキの葉で作った藁で寝た。由緒ある名前らしい。

すでに触れたように、彼はオークランド大学の太平洋言語学科でクック諸島マオリ語を教えている。この学科は比較的新しい学科で、サモア語、トンガ語、クック諸島マオリ語、ニウエ語などを教えている。それぞれの言語のネイティブスピーカーが教師になっている。サモアから来た学生（サモア語の母語話者である）がサモア語を習う、という奇妙な事態になっている。これは、学位と就職がからんでのことである。

彼はクック諸島のマウケ島（Mauke）の出身である。マウケ島は、隣接するミチアロ島（Mitiaro）およびアチウ島（Atiu）とともに「三つ子島」（Nga-Pu-Toru）とよばれている。マウケ島もミチアロ島も、かつてはアチウ島の支配下にあった。今でも、酋長の家系同士では、この人とこの人が結婚するべきだというような特別な関係がある。

彼は、ラロトンガ島出身の女性と結婚した。出会いは、ニュージーランドだったらしい。彼女一族はラロトンガ島のアバチウ港に面した地区に住んでいる。クック諸島は、今でも土地の私有制がない。土地は全て部族（氏族と言うべきか）の所有である。外島出身者がラロトンガ島で土地を得て家を建てるということはできない。よそ者は、ラロトンガ島民のあいだから配偶者を得て、その配偶者が一族から与えられる土地に住む。

ラギツクア・モエカア論文は、彼がラロトンガ語について考えたことを書いている。クック諸島在住の人口は大体2万人弱である。選挙がある時は急増する。一昨年、官房長官に訊いたところ「17,000ぐらいだろう」との答えだった。

クック諸島国の国民人口は、その数字にさらに海外に居住する4万人（あるいは3万5千人程度か）が加わる。クック諸島に住んでいるクック諸島人よりも、クック諸島の外に住んでいるクック諸島人の方が多い。クック諸島人の居留地の一つは、ニュージーランドのオークランド周辺である。1990年代の初めに、ニュージーランドは「小さい政府」を目標にした行政改革をやった。そのため非常に不況に陥り、まっさきにポリネシア系の人々が職を失った。その時代に、多くのクック諸島民がオーストラリアに移住し

た。今では、メルボルンの周辺にもクック諸島民のコロニーがあると聞いている。

クック諸島は北部と南部に2分される。北部の島々は大体が環礁である。海拔は高々10メートルである。南部は、かつての火山がまだ海面上に残っているような島々である。島の最高地点は、100メートルとか150メートルに達する。

北にはペンリンやラカハンガ・マニヒキがある。ペンリンは深い内海を抱え込んだ巨大な環礁である。ラカハンガ・マニヒキは、二つの環礁である。19世紀までは、二つの環礁に一つの集団が住んでいた。彼らは、ラカハンガでウツボや貝やウニやナマコを獲り尽すと、全員がマニヒキに移動した。そしてマニヒキで10年か20年のあいだ暮らしをした。マニヒキの資源が枯渇すると、全員でラカハンガに移った。遊動と定着の中間の生活をしてきた。19世紀の中頃にキリスト教の伝道師たちが入って来た。彼らは、この半遊動的な生活を不安定なものに感じたようだ。そこで人口を二つに分けた。それ以後、ラカハンガに半分、マニヒキに半分が住んでいる。彼らは、「私たちは一つの集団だ」という意識を残している。この二つの環礁の言語は、ハドソンの「同言」という意味でも、一つである。

北部にはプカプカ語 (Pukapuka) という言語がある。クック諸島のマオリ語は東部グループに属するが、このプカプカ語だけが西部グループに属するサモア系の言語であると言われている。プカプカ語の語彙を書き出してみると、たしかに、それはラロトンガのマオリ語のそれよりは、サモア語のそれに近い。サモア語と同じ語源を持つ単語の割合の方が多いという意味で「西部グループ」に属するとされる。しかし、文法的なタイプで言えば、クック諸島マオリ語と同じである。

南部のアチウ島、ミチアロ島、マウケ島は別々の島である。「椰子の木に登れば、おたがいに隣の島が見える」ほどたがいに近接している。かつては一つの政治体を構成していたとは言え、現在ではたがいに敵愾心を抱いている。「同言」という意味では三つの言語がある。

パーマストーン語は「英語の変種」である。話者は50人程度である。すべて一族で「Marsters」を名乗る。彼らは、「我々が話している英語はイングランドのEnglishではない」「コーンウォールのCornish Englishだ」と言う。「リヴァプール Liverpool の英語だ」と言う人もいる。彼らが私と話す時の英語は、特に変わった英語ではない。「自分たち同士で話す時は、こんな英語とは違う」と彼らは主張する。当初は英語の話し手は男性が1人だけで、残りはポリネシア語を話す女性たちだった。その1人の男性から出自した集団である。

クック諸島のキリスト教徒は、プロテスタントもカトリックも、諸島全域で同一(ラロトンガ語訳)の聖書を使っている。聖書は現在の言語状況を将来した重要な要因の1つである。1820年代の初めに、ロンドン伝道会の布教線が、タヒチからクック諸島に伸

びた。1851年になると伝道会は「ラロトガ語訳聖書」5,000部を完売した。印刷される何年か前から代金を集めて、5,000部を完売したという記録になっている。5,000部という数字は過大すぎるようにも思う。しかし教会の記録ではそうなっている。

「ラロトガ語訳聖書」は何回か改訳されている。私が持っているのは1880年頃の訳である。聖書そのものには、翻訳や印刷の年度は印刷されていない。現在は教派を問わず同じ聖書が使われている。主要な「教派」は、ロンドン伝道会の後継教会である Congregation 系のクック諸島キリスト教会、聖心修道会系のカトリック教会、末日聖徒教会（モルモン教会）などである。いずれの教会も同じ「ラロトンガ語訳聖書」を共通に使っている。カトリックの人たちは、ほとんど聖書は読まない。少なくとも、フレンチポリネシアやクック諸島のカトリック教徒たちは、聖書は持っているが読まない。読むのは、教理問答（catechism）の類か祈祷書の類である。

この「ラロトンガ語訳聖書」の言語は、古い時代の正しいマオリ語だということになっている。これは、3人か4人のロンドン伝道会のイギリス人牧師たちが、タヒチ語の知識を基礎にして作った翻訳である。たくさんのヘブライ語、ラテン語、ギリシャ語の単語が、多少ともポリネシアの音韻体系に合わせた形に転写されて混入されている。100年を超えて使われてきたものだが、奇妙な言語である。

島々では土着の言語は多少異なるが、クック諸島キリスト教会はどこでも同じ聖書を使って信仰活動が行なわれてきた。また、日曜日や水曜日の礼拝では、牧師や副牧師（deacon）たちは、どこの島でもラロトンガ語で説教をする。どの島でもラロトンガ語でミサが執り行なわれている。ただし、外来者へのサービスで英語を使ってくれたり、おそらく年少者へのサービスでその土地の言語でその日選んだマタイ伝の第何節かの注釈をやってくれたりということはある。

行政の用語としては、今世紀の初めからずっと英語が使われている。クック諸島国は、ニュージーランドと自由連合を結んでいる（Free Association with New Zealand）が、独立国である。防衛と外交はニュージーランドに任せている。それ以外のことは一切自分たちで取り仕切る。そういう国家形態である。自分たちの憲法もある。

国家元首は、現在はエリザベス二世女王である。イギリス（連合王国）の国家元首がクック諸島の国家元首でもある。ラロトンガ島でいちばん立派な建物は、“Queen’s Representative”の公邸である。「エリザベス女王の代理人」は、女王陛下からの Knight の称号を伝達したり、女王陛下に「この人を Knight にしてほしい」とか「勲章をやってくれ」とか上奏したりしている。私は、彼の持つ政治的な機能の詳細については知らない。

学校教育では、一昔前のニュージーランドのマオリ人教育と同じで、建前としては完全に英語で教育が行なわれている。小学校から中学校（college）まで、12年間の学校教

育が行なわれている。12年間プラス1年やらないと、ニュージーランドの大学には入れない。高等教育機関の一つとして、南太平洋大学 (University of South Pacific, USP) の分校 “Extension Centre” がある。ここでは、10数年前から、衛星回線を通じて、フィジーの本校の授業などが受信できるようになっている。土地の人が講師になって行なう授業もある。

英語には、その他に、域内共通語としての機能がある。クック諸島の人たちは、全員が “British Subject” で “New Zealand citizen” である。彼らは女王陛下の臣民だから、自由に英国 (Great Britain) に出入りできる。ロンドンに行っても、特別な手続きなしに (労働許可 work permit を取得しなくても) 職につくことができる。ニュージーランドに関しても、オーストラリアに関しても、同様である。パスポートを提示すれば、自由に出たり入ったりできる。しかし、英語ができなければ、たとえメルボルンに行っても、冷凍倉庫の整理係というようないい賃金の職場では働けない。

英語は、行政の言葉であり、学校教育の言葉であり、出稼ぎに行く時の武器 (資本) としての言葉である。だから、英語が完璧に話せる者と話せない者とは、10年20年と経つうちに、経済的な格差がますます開いていく。英語が話せる気の利いた人たちは、20年ほどニュージーランドで働くと、日本のサラリーマンが3,000万円も4,000万円も出して買う程度の家を、オークランドの郊外で手に入れられる。

テレビ放送は、外島の小さい島でも、衛星回線で視聴できる。使用言語は、一日に30分ぐらいのラロトンガ語の番組を除いて、すべて英語である。ただし、ほとんどの番組は、ニュージーランドのテレビ番組を録画して何時間遅れかで流すか、あるいはアメリカ映画のビデオを流すものである。

観光も英語使用を推進する要因である。ただよく分からないこともある。アイツタキ島はクック諸島一の観光地である。観光客は、英語圏の人がほとんどである。オーストラリア人かニュージーランド人で、年金生活をしている高齢者が多い。観光から経済的な利益を受けるためには、英語能力は必須である。このクック諸島きっての観光地であるアイツタキ島は、よく土地の言語 (アイツタキ語) を保持している。一般に「テレビと観光の影響で、次第に英語が土地の言葉を駆逐しつつある」という議論が行なわれる (行政サイドでも個人のレベルでも) が、アイツタキ島にはこの議論は当てはまらない。

「威厳言語」とは、例えば、仏領ポリネシアではフランス語である。そこではフランス語が話せるか話せないかによって、その人間の「威厳」(prestige) が異なる。クック諸島では英語が「威厳言語」である。英語能力、特に英語で演説する能力は、「威厳」の大事な源泉である。私の観察では、マオリ語で演説できない人は、英語でも演説ができない。その間に関係があるようだ。英語は流暢に話すけれども、それは会話レベルだけであって、大勢の聴衆に対しては英語を使えない人がいる。英語で、女王陛下の代理

人に向かって島民の窮状を訴えたり、聴衆に向かって演説したりできるのは、同時に、マオリ語でもそれらの言語行動ができる人ではないかと思う。

ただし、そういう人はいつでも、英語は自分たちの印・民族の標識 (ethnic identity, national identity) ではない、と言う。「英語はそういうものを失わせる。だからマオリ語は維持しなければならない」と論じる。たいてい、そういう議論をする人たち自身は、英語でそういう議論をまくしたてることのできるほどの英語力を持った人である。

ラギツクアは、「ラロトンガ語は、子どもたちが話さなくなったので、消滅するかもしれない」と考えている。「21世紀の初めに消滅したとしても、私は不思議とは思わない」と言う。ただし、私はもう一行だけ追加したい。「ラロトンガ語以外の言語がラロトンガ語化されながら存続するだろう」と。ラロトンガ島の人たちがラロトンガ語を話さなくなっても、例えばペンリン島の人々が、ペンリン語は失いながら、ラロトンガ語を話すようになるかも知れない。ラロトンガ語は、話し手が置き換わって、相変わらず21世紀にも続いていくかもしれない。

4 復権運動

ニュージーランドやハワイでは、土地の言語 (マオリ語やハワイ語) の復権運動がある。ニュージーランドでは、1987年にマオリ語が、英語とならんでニュージーランドの公用語に指定された。マオリ人たちの運動が功を奏して、法律のレベルでマオリ語が公用語になった。私には理解できないが、マオリ人たちの心の中にはこんな感情もあるらしい。「公用語になったということは、マオリ人以外の人間もマオリ語を自由に操るようになるのではないかと彼らは言う。どういうことかと訊きただすと、彼らはこんなことを言う。「英語を見てご覧よ。お前は日本人だけれど英語を話しているだろう。しかし、イギリス人の話しているような英語を話しているわけじゃないだろう。今、世界を眺めると、英語はイギリス人のコントロールを超えてしまっている。イギリス人が、これがいい英語だとか、こう言いなさいとか言ったって、もうイギリス人の力の及ばないところで、日本人も勝手な英語を喋っているし、我々も勝手な英語を喋っている。それで話が通じて便利じゃないか。マオリ語も公用語になると、そんなことになるかもしれない。だからイギリス系のやつとか、ドイツ系のやつとか、リトアニア辺りから来たやつとか、そして最後には日本人なんかが入って来て、そういうやつらがみんなマオリ語で『ああでもない。こうでもない』と言い出したら困るよ。お前 (日本人) がいくらマオリ語を勉強したって、ちゃんとしたマオリ人のマオリ語が話せるわけがない。マオリ語が公用語になって、イギリス人なんかがみんなマオリ語を話すのは困るのだ。」

クック諸島などに調査に行くと、まず、なかなかインフォーマントになってくれる人

が見つからないことがある。インフォーマントになっても、なかなか土地の言語を話してくれない。彼らは疑心暗鬼なのだ。「お前は、私の言葉を録音して、どうするのだ。カセットにして売ることか」と言う。「カセットにしたって、お前の言葉なんか1ドルにもならない」とか、「私は学校の教師だから、日本の子どもたちにお前たちの言葉のかけらでも教えてあげたいのだ」とか言いながら、ぼつぼつと話をしてもらう。「言葉を取られてしまう」という感覚が彼らにはあるのである。

私は、足掛け13年ぐらいマガイアという島で、単語の聞き取り調査をやった。その島で長年にわたって話を聞いていると、初めにインフォーマントになってくれた高齢の酋長とか判事とかが次第に亡くなっていく。そこで、次の世代の人たちに話を聞くことになる。すると、「その話は俺に訊くな」と言う。「何年前か、お前は誰それのおじいさんからその話を聞いて、テープにも録音したし、ノートにも書いたし、英語の訳もつけた。だから俺に訊くな」と言う。そこには「言語を日本人に取られた」というような感覚があるらしい。

もちろん、マオリ語が公用語に指定されて喜んでいる人もいる。マオリ語公用語化運動をしてきた人たちの中には喜んでいる人もいる。しかし、マオリ語を何とか盛り立てようとしていた人々の中には、「これは困ったことになった。いよいよマオリ語も、我々のコントロールから外れて、英語みたいに国際語化して、あちらにはピジン・マオリ語、こちらにはクレオール・マオリ語なんていう状況になるのではないか」と心配する人たちがいる。

こういう言葉を聞かされると、あらためて言語に対する所有観念について考えさせられる。言語は物質的財産であるのだ。ちなみに、マレー語では話を伝える人は「話の持ち主」(empunya cerita)とよばれる。インフォーマントは「話の持ち主」である。持ち主から話を分けてもらうためには、しかるべき礼を尽くして、干しバナナを持っていくとか、干し肉を持っていくとか、お金を払うとかが必要なわけである。情報化社会では、情報は有償である。前情報化社会でも、どうやら、情報は有償であるらしい。どこにも奇妙さはない筈である。

文 献

Hudson, Alfred B.

1967 *The Barito isolects of Borneo: A classification based on comparative reconstruction and lexicostatistics*. New York: Cornell University.

Rangitukua Moeka'a

1999 A brief overview of the languages of the Cook Islands. In Kazumichi Katayama, and

Norio Shibata (eds.) *Prehistoric Cook Islands: People, life and language, part 1: Anthropology and archaeology*. Rarotonga: Cook Islands Library and Museum Society.